遊戯王ＧＸ～パラレル・トラベラー～

カイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ～パラレル・トラベラー～

【Ｎコード】
Ｎ４６９４Ｚ

【作者名】
カイナ

【あらすじ】
デュエルモンスターズが好きな双子の少年ライとアルフ、その幼馴染である少女エルフィ、ライとアルフの両親であるレオとメリオル。五人は偶然一緒になった帰り道、泥酔して線路上に落っこちてしまった美女と青年を助けるため線路に下りるが間に合わず進入してきた電車に轢かれかけ、その瞬間五人の意識がなくなる。それから彼らがいたのはどこともしれぬ空間、そこに立っていた美女――神によれば五人はもとの世界では死んでしまい、元の世界に戻る事は出来ないがせめてものお詫びにと別の世界で新たな人生を歩む事

を提案される。
これは五人が遊戯王ＧＸの世界に転生し、その子供達がそこに住む者達と繰り広げるストーリー。

プロローグ

とある地下鉄の駅、夕方とも言える時間帯に三人の少年少女がここで電車を待っていた。

「いやー、楽勝楽勝。今回も優勝しちゃったね。やっぱ俺らは最強のトリオだ！」

「兄さん、油断してたら足元掬われるよ」

「そうそう。あなた一人で三人抜きしたのもあったけど手も足も出ずにやられて私達がフォローしたのも多かったわよね」

黒い髪をざっくばらんな短髪にしている元気な少年がけらけらと笑いながら口を開くとその隣に立っている、こっちは水色の髪を短く切って整えている少年が黒髪の少年を小突きながら言い、その逆横に立っている、金髪をボーイッシュな短髪にした少女がクスクスと笑いながら続けると黒髪の少年はたははと笑う。

「ったく、相変わらずだなお前らは」

するとその背後から妙に呆れたような笑いながらしい声が聞こえ、三人は振り向く。と黒髪の少年と水色髪の少年が驚いたような顔を見せる。

「「父さん！　母さん！　なんでここに？」」

そこに立っていたのは黒髪をざっくばらんな短髪にしている男性――丁度黒髪の少年をまんま大人にしたような外見、違いといえば少

年の瞳が水色なのに対し男性の目は黒いというところくらいか――と水色の髪をポニーテールにしている女性。すると男性が笑った。

「仕事帰りだ。残業頼まれそうになったが逃げ出した」

「全くもう、クビになったらどうするの？……で、私は晩御飯の材料買出し。今晩はカレーよ」

男性の笑いながらのあっさりした言葉に女性は呆れたように笑いながら返した後エコバックの中にあるカレールーやニンジンなどの野菜を見せてそう続ける。それに少年二人はやたっと声を出した。

「お～っし、も～一軒行くぞー」

「……もう、帰ろ……」

すると彼らの横に青年と女性――青年の方は薄緑色の髪を短髪にしており、女性の方は健康な葉っぱのような濃い緑色の髪を長く伸ばしている――が現れ、女性は明らかに酔っていると言わんばかりに真っ赤な顔で声を出しており、彼女を支えている青年――こちらも飲んだのか顔が赤い――は必死で女性を支えながらそう声を絞り出す。するとその次の瞬間青年の膝がガクンと折れ、二人の身体が線路上に落下する。

「やべえ！？」

「レオ！？」

それを見た瞬間男性――レオはすぐに鞄をそこに放り捨てて線路に

降り、それに習うように四人も線路に降りる。

「おいあんたら、大丈夫か！？」

「ぅ～……」

「ぅぷ……」

レオが声をかけるが女性も青年も意識が混濁しているような状態、それを確認するとレオはホームを見上げて声を出した。

「運び上げるので上空けてください！　それと駅員さんに連絡お願いします！」

その言葉を聞いた他の人達はその場を退き、何人かはどこかに走っていく。それを見るとレオは線路に降りた身内達を見た。

「ライとアルフ、エルフィはこの子を、俺とメリオルで女性を引き上げるぞ」

その言葉に四人はうんと頷き黒髪の少年――ライ、水色髪の少年――アルフ、金髪の少女――エルフィは青年の両手両足を持って彼を持ち上げ、レオとメリオルは女性を持ち上げる。その瞬間、プァーンという音とともに眩しいライトが彼らを照らし出した。

「げっ！？」

電車が来た、駅員への連絡は間に合わなかったのか、一行はそんな事を考えるがもう酔っ払いの救助どころか自分達が逃げる事すら間に合わない。そう考えながら五人＋酔っ払い二人は白い光に包まれていった。

「てめえは本当に！　どれっだけ人に迷惑かけたら気が済むんだ！？」

「ぅ……」

「いやーあはは、反省してるって……」

「なん、だ？……」

怒り心頭とばかりの怒号に飄々としたような謝罪の声、それらを聞いたレオは目を覚まし、起き上がる。

「ここは？……」

見渡す限り真っ白、これだけを聞くと雪に囲まれた場所でも想像するかもしれないが本当に真っ白、無機質な感覚すら思わせるような場所だ。レオがそう考えている間に周りで気絶していたメリオル、ライ、アルフ、エルフィも目を覚まし、前の方で女性に説教を行っている青年もそれに気づいた。

「あぁ、目が覚めたか」

「あんたらはさっきの酔っ払い……あんたら、何者だ？」

青年の言葉にレオは用心深い様子を見せながら返し、それを聞いた

青年は困ったように頭をかくと女性の方を見た。すると女性はうんと頷いて彼らの前に立つ。

「私達は……まあ、あなた達人間の言葉で言えば私は神、彼は天使という表現が正しいわね」

「か、神様に天使……ねえ」

女性の言葉にメリオルは驚いた様子を見せるが直後何か言いにくそうな表情を見せる。と天使と表現された青年がため息をついた。

「言いたい事は分かってる。仮にも神と呼ばれる存在が街中で酔っ払って電車に引かれかけるような真似するかとでも言いたいんだろ？」

「あ、いや……」

「事実その通りだ。こいつは神としての自覚が欠如してる、もはや人間で言う俗念に塗れたバカとしか言いようがないからな」

「「「そ、そこまで……」」」

天使の言葉にメリオルが言い繕おうとするが神の部下であるはずの天使自身が神をこき下ろし、それを聞いたライとアルフ、エルフィが引きつった表情でそう呟く。すると神がイラッとした様子で天使に食いかかった。

「一緒に酔っ払ってぶっ倒れたくせに！」

「元はといえばお前が放置していた輪廻転生の管理と魂の天国行き

地獄行き裁判の結果を纏めるために一週間貫徹した上酔っ払ったお前が無理矢理酒飲ませたことが原因だろうが！？」

神の言葉に天使が怒鳴り返すと神はぎくりとばかりのリアクションを取って瞬時に顔を逸らす。それから天使はまた呆れたようにため息をつくとレオ達の方を向いて口を開いた。

「まあ、何を言おうが俺達のせいであなた方が亡くなってしまったという事実に変わりはない。本当に申し訳ない」

天使はそう言って深く頭を下げる。するとライがふと口を開いた。

「ん？　これって……」

「あ、ラノベとかでの転生フラグ！」

ライに続けてアルフも声を出す。すると神が笑い声を出した。

「おー子供は鋭い鋭い。流石に私達のせいで死んじゃってそのままっていうのは後味悪いからね。どっかに転生させてあげようって思ってるのよ」

「転生か……」

その言葉にレオがぼそりと呟く、と神は何かを考えるように虚空を見上げて頬に人差し指をやるような仕草をした。

「んー、まあ転生って言ったら語弊があるかな？　正確に言えば容姿と記憶はそのままに別世界に送るって言う方が正しいね」

「異世界旅行かよ……おいちょっと待て」
続けての言葉にまたレオが返す、とそこで気づいたようにここに送られてきた一人――エルフィを見た。
「俺達四人は家族だから良いが、エルフィは戸籍上他人だぞ！？どうする気だ！？」
「「まあ、将来夫婦になる予定だけど」」
レオの言葉にライとエルフィが聞いてる方が恥ずかしくなるような台詞をさらっと言い、それにアルフとメリオルが呆れ顔でため息をつく。と神は「ああ」と声を漏らした。
「……ね、なんとかなんない？」
「俺に聞くな……そうだな……エルフィ、と言ったか？　話を聞く限りだが身内にするのは問題がありそうだな。なら、従姉弟が同居しているという事にすればどうだ？　戸籍調整はこっちでどうにかする」
「出来るのか？」
「こいつはバカだがまがりなりにも神だ。それぐらいは造作も無い」
天使の提案にレオが聞き返すと天使は神を指差しながらさらっと返し、それに神は複雑な表情を見せる。それから天使は少し考えた後また口を開いた。
「それじゃ、あなた達にはどの世界に転生すればいいか考えるが、

希望があれば聞こう。せめてものお詫びだ、なるべく期待に沿うようにするよ」

「転生させんの私なんだけど」

天使の言葉に神が愚痴るが天使はシカト、それを聞いたライは少し考えると右手を挙げた。

「なあ、じゃあ遊戯王の世界は駄目か？　俺達デュエルモンスターズが好きなんだ」

「確かに、今日も大会で優勝したってはしゃいでたな。もしそこの世界に行くなら俺達夫婦もデュエルモンスターズに関わる仕事に就かせてもらっていいか？」

ライの言葉にレオがふっと笑いながら返した後そう尋ね、それに天使は少し考えるとああと頷いた。

「分かった、じゃああなた達の世界で言う遊戯王の世界に転生させよう。だがどの時代に行けるかまでは分からないから、そこの点は許してくれ」

「別にいいよそれくらい。楽しみにしておくからさ」

天使の言葉にライが笑いながら言うと天使も思わず笑みを浮かべる。すると今度はレオが手を挙げた。

「ちょっと待ってくれ、こっちからも一つ頼みがある」

「ん？」

「俺達全員の年齢を五歳でいい、若返らせてくれ。物語の主役は子供達だ。俺達大人は五年の歳月でこいつらが戦えるように立派な裏方になってやるよ」

レオの提案に天使は驚いたように目を丸くする、ややがて目を細めるとくっくっと笑った。

「分かった。任せておけ」

「だーかーらー！　実際にその作業すんの私なんだけどー！？」

天使の言葉に神が叫び声を上げるがやっぱりシカト、神はぶっすーと頬を膨らませると諦めたようにその旨を了解した。

「分かったわよ。転生転移先は遊戯王の世界、容姿性別はそのままで年齢は五歳若返らせる、ね。まあ頑張ってみるわ……女神エデン、ちょっとばかり本気出してやるわ」

神――エデンは立ち上がると一行を見据えて不敵な笑みを浮かべ、彼女が両手を広げると一行を包み込むように光の魔法陣が敷かれる。

「んじゃ、お達者でー」

「おう！」

エデンの言葉にライは元気よく右手を挙げて返し、レオはふっと笑うと腕組みをする。それらを見ながらメリオル、アルフ、エルフィも笑みを浮かべていた。

「転移転生、開始！」

その言葉と共に彼らの視界は光に包まれていき、彼らの意識も消えていった。

プロローグ　（後書き）

ふ～。遊戯王Ｘに続いて遊戯王小説、今度はＧＸトリップものです。
レオ「さて、今回はどんなプレイングミスが飛び出すかな？」
ミスすんの前提！？　それ酷くないか！？
レオ「一話に一回プレイングミスが出てる前作だ。まあ期待はしない」
うっせーやい……ちなみに今回の主役は前作で脇役だったライとアルフ、エルフィ。あぁちなみに言っておくと今回はレオとメリオルが夫婦、ライとアルフはその子供で双子の兄弟となってますが、これが彼ら本来の関係なんですよね。エルフィに関しては……まああんまり触れないでください。
レオ「まあ初期の設定が設定だからな」
さてさてＧＸの世界で彼らはどういう生活を繰り広げるのやら、です。じゃ今回はこの辺で。それでは。

第一話　入学試験デュエル

ある五人の一般人を取り囲む平凡な日々、それはとある夕方の地下鉄の駅で終わりを告げていた。そこで線路に落っこちた酔っ払いを助けようとして電車に轢かれてしまったが実はその酔っ払いは神様であり自分のせいで死んでしまった責任から彼らは容姿性格はそのままに遊戯王の世界へと転生する。それから五年の歳月が過ぎた……。

ここはごく普通の庭付き一戸建ての一軒家の庭。ここで男性と少年がデュエルを行っている。

「レベル３のハウンド・ドラゴンにレベル３のチューン・ウォリアーをチューニング！　シンクロ召喚、現れろ！！　［大地の騎士ガイアナイト］！！！」

「げぇっ！？」

黒髪黒目の男性がそう口上を上げると共に一人の戦士は三本の光輪へと、一体の竜は三個の星へと変化して重なり合い、その輪の中心から光が放たれると男性の場に人馬一体と化した騎士が姿を現し、男性と対峙している少年――男性とよく似た顔立ちをしており違いといえば瞳の色が水色というぐらい――は絶叫を上げる。

「ガイアナイトでニュートを攻撃！　ガイアランスシュート！！！」

「ぎゃあああぁぁぁぁっ！！！」ＬＰ５００→０

男性の場に現れた騎士が少年の場の悪魔を貫き、その衝撃が少年のライフを削り取り止めをさす。そして少年はがくんと膝をつくと我

慢出来ないように声を荒げた。

「ずるいよ父さん！　こっちの世界にはまだシンクロモンスターは一般流通してないのに！！！」

「これが、カードテストプレイヤーの権力ってもん――」

「――なわけないでしょっ！！！」

少年の声に彼の父親である男性が笑いながら言うと突如そんな怒号が響き渡り彼の頭にフライパンがぶち当たる。

「はぐっ！？」

「ったくあんたはまたテスト中のカードを勝手に持って帰ってきて！　守秘義務守りなさいよ！！」

「あったたたた……メリオル、んな硬いことといわなくても別にいいじゃねえか少しぐらい……」

「レオだけが怒られるならまだしも妻である私も同時に怒られるのよ！？　面倒事出さないでよ今がシンクロモンスターの一般流通に大事なとこなんだから！！」

フライパンを無防備にくらった男性――レオが悲鳴のような声を出すと家の中から女性――水色の髪をポニーテールにしており、端正な顔は怒り心頭とばかりに眉が吊りあがっている――が出てきてそう怒号を上げ、レオが頭を押さえながら呟きそう言うとメリオルはまた怒号を上げる。すると少年――ライはさっきの衝撃でレオのデュエルディスクから落ちたガイアナイトのカードを拾う。

「それにしても、転生先って５Ｄ，ｓじゃないのにシンクロモンスターとか出して大丈夫なのかな？」

「あ～、デュエルアカデミアのホームページを見る限り見事にＧＸ時代どストライクだよな」

ライの言葉にレオは先日パソコンで見たデュエルアカデミアのホームページを思い出しながら返す、とメリオルはくすりと小悪魔のような笑みを浮かべた。

「大丈夫よ別に。私はちょっとしたお酒の席で“低レベルのモンスターを組み合わせることで高レベルのモンスターを召喚するシステムって面白くないですか？”って酔っ払って零しただけだもん。それが偶然ペガサス会長のお耳に届いて、シンクロモンスターの概念が生み出された。そ、れ、だ、け。まあ一応スターダストやレッド・デーモンズとかの５Ｄ，ｓ時代のキーカードは作らせないよう注意してるから安心してね？　一般的なシンクロモンスターならともかくそれが量産されたら後々どういう弊害が起きるか分からないし、流石にそれはまずいからね」

（（……性質悪いな……））

「何か言った？」

「「いえ、何も！！！」」

メリオルはあっけらかんとした様子でそう言い、最後に悪戯っぽく微笑んで小首を傾げながら続ける。それを聞いた父と子は心中で呟くがメリオルが何かを察知したとばかりに尋ねると二人は異口同音で返した。

「さーてと、シンクロモンスターが流通した後はエクシーズモンスターね。どういう風に提案しようかしら？　ハートランドがこの世界と同じ世界観なのか知らないけど、まあタッグフォースもそうだったんだしＮｏ．を流通させても大丈夫よね。まあ何にせよこっそりさりげなくしないとね……」

メリオルはくるんと踵を返すと策を考える軍師のような表情でどことなくあくどさを感じさせる笑みを浮かべながら家の中に戻って行き、レオとライは顔を見合わせるとはぁとため息をついた。

「「ただいまー」」

「あ、アルフとエルフィだ。おかえりー」

玄関の門の方から聞こえてきた声にライはそう返し、少年と少女――少年の方は水色の髪を調えた形で短髪にしており、一見すれば女性にすら見えるような中性的な顔立ちをしている。少女の方は金髪碧眼でその髪はボーイッシュな短髪に切り揃えられている――が庭の方に来た。

「またデュエルしてたの？」

「ああ。父さんシンクロモンスター使ってきてさ、負けた」

「……レオさん、ああ今は叔父さんだっけ……大人気ないですよ？」

少年――アルフにライが肩をすくめながら言うと少女――エルフィが呆れたような目をレオに向ける。それにレオがふぅと息をついた。

「エルフィが姪か……なんか妙だな、まあ転生前も家族ぐるみの付き合いだったが」

「私皆と比べて大分乱暴に放り込まれたわよね……私の両親は電車の事故で死んでしまって、親戚であるここ空時家に引き取られたって設定だもん。私の名字も空時になっちゃってるし」

レオの言葉にエルフィが乾いた笑い声を出しながら返す。

「ほんとに悪いな、この世界に容姿年齢ほとんどそのままに転生させるとしたらこれが精一杯だったんだ」

「どわっ！？　天使か、驚かせるなよ……」

さらなる突然の声にレオがびくっとなりながらそっちを見ると、そこには彼らがこの世界に転生する事になった原因の一人である天使が立っており、レオは驚いたように息を吐きながらそう返す。

「さて、いよいよ転生してから五年だな。明日子供三人はデュエルアカデミアへ実技試験とやらを受けに行くんだろ？」

「おう！　目指せ合格、目指せラーイエロー！」

「ま、原作を辿るならオシリスレッドの方が面白そうだけどね。遊城十代君と同学年になれるみたいだし」

「私は女子だからオベリスクブルー決定ね。どういう風になるのか楽しみだわ」

天使の言葉にライが元気良く言うとアルフもくすくす笑いながら返し、エルフィもふふっと笑ってそう返す。それを見てから天使はレオを見た。

「あなた方もインダストリアル・イリュージョン社にテストプレイヤーとカードデザイナーとして就職させましたけど、何か不都合は？」

「あーいやいや、結構いいとこ出て就職した事になってるし、庭付き一戸建ての家まで貰っちゃって悪いぐらいだよホント」

「この家に関してはお詫びだから気にしないでください……じゃ、こっちから干渉するのは基本的にこれが最後って事で。後はそっちの方で物語を紡いでください」

「おう！」

天使の心配そうな声にレオは右手を横に振りながら笑って返し、それに天使は軽く会釈をして返した後そう続け、それにライが元気良く答える。それを天使は一瞥すると柔和に微笑んだ。

「それじゃ、あなた達に大いなる加護がありますように。それでは」

そう言い終えると同時に天使の姿はふっと消える。それを見送った後レオは三人の子供の方を振り返った。

「それじゃ、デュエルアカデミア実技試験頑張れよ。ところでお前ら、原作知識は？」

「流石に五年だもん、大雑把にキャラ設定を覚えてるくらい。ＧＸ時代って分かったのもついこの前だし」

「僕も話の流れは大分曖昧になってきてるよ」

「右に同じく」

レオの言葉に子供三人は肩をすくめる、するとそれにレオはふっと笑った。

「それでよしだ。俺達というイレギュラーがある以上原作その通りに進むわけないからな。第二の人生だ、しっかり楽しんで来い。俺達も裏方でカード作って援護するからよ」

「皆ー、ご飯できたわよー。ライとアルフ、エルフィは明日に備えて早くご飯食べてとっとと寝なさいねー」

レオの激励の言葉が終わるとメリオルの呼びかけが聞こえ、四人はそれを聞くと「はーい」と返して玄関から家の中に入っていった。

それからその翌日、三人は家のドアをバァンと開けるとドドドドドと地響きが発生する勢いで突っ走る。そしてアルフが怒号を上げた。

「このバカ兄貴！！！　寝坊はいつもの事だけどなんでよりによって実技試験当日にまで寝坊するのさ！！？？」

「もー！　ライを叩き起こすのに大分時間浪費しちゃったわよ！！」

「だーかーらー、悪かったって言ってんじゃん！」

アルフとエルフィの声にライは全速力で走りながらも両手を合わせて謝る、そんな事をしていながらも三人は僅かにスピードを落とす事すらしていなかった。そして三人は試験会場に到着すると息を荒げながら受付を行うと会場に入場する。それから試験が始まり、最初に受験番号一番の人が呼ばれ、デュエル場に立つ。それから受験番号十番までの人がデュエル場に上がった。

「あ、あれ三沢大地だ」

「原作通りなら合格は確定ね。さてと、私達もデッキの確認しておきましょう」

ライが笑みを浮かべながら言うとエルフィはふふっと笑いながら返し、デッキケースからデッキを取り出して確認を始めると二人もそれに習ってデッキの確認を始める。それから少し時間が経った時だった。

「試験番号２９番！」

「あ、私ね。じゃあ行ってくるわ」

「頑張れよー」

試験官の声にエルフィは気づいたようにデッキを纏めてデュエルディスクに収めると二人に軽く手を振って言い、ライの言葉にこくんと頷くとデュエル場に向かう。試験官は黒いサングラスをした教師だ。

「試験番号２９番、空時エルフィです。よろしくお願いします」

「うむ、今出来る全力でかかってきなさい」

エルフィが礼儀正しく礼をして名乗ると試験官もうんと頷いてそう返し、二人はデュエルディスクを展開する。

「「デュエル！！！」」

「先攻は貰います。ドロー！」

掛け声の直後エルフィが素早くそう言ってデッキからカードをドローし、ちらりと手札を見るとその内の一枚を手に取った。

「私は［豊穣のアルテミス］を守備表示で召喚！　カードを二枚セットしてターンを終了します」

豊穣のアルテミス　守備力：１７００

豊穣のアルテミス
効果モンスター
星４／光属性／天使族
攻撃力１６００／守備力１７００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分のデッキからカードを１枚ドローする。

エルフィの場に豊穣の名を冠する天使が守りの体勢で姿を現し、その後ろに二枚のカードが伏せられた状態で姿を現す。それからエルフィはエンド宣言を行った。

「ふむ、【エンジェル・パーミッション】と言ったところでしょうか？　私のターン、ドロー」

「リバースカード、オープン！　カウンタートラップ［強烈なはたき落とし］。ドローカードをそのまま墓地へ捨ててください。そしてカウンタートラップの発動によりアルテミスの効果が発動、カードを一枚ドローします」

強烈なはたき落とし
カウンター罠
相手がデッキからカードを手札に加えた時に発動する事ができる。
相手は手札に加えたカード１枚をそのまま墓地へ捨てる。

「むぅ……」

試験官はエルフィのデッキ内容を予測しつつカードをドロー、するとエルフィは伏せていたカードを発動しそれを見た試験官は残念そうな顔をしながらドローカードを墓地に捨て、エルフィは逆にカードをドローする。

「ならば……私は［電動刃虫（チェーンソー・インセクト）］を攻撃表示で召喚、バトルを行います！　電動刃虫で豊穣のアルテミスを攻撃！」

電動刃虫　攻撃力：２４００

電動刃虫（チェーンソー・インセクト）
効果モンスター
星４／地属性／昆虫族
攻２４００／守０
このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード１枚をドローする。

「リバースカードオープン！　カウンタートラップ［攻撃の無力化

」！　攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了。そしてカウンタートラップの発動によりアルテミスの効果でカードドロー！」

攻撃の無力化
カウンター罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

巨大な顎がチェーンソーになっている昆虫が現れ、アルテミス目掛けて顎を突き出すがその攻撃は不思議な障壁に阻まれてしまい不発に終わる。そしてエルフィは豊穣の力でカードをドローした。

「やりますね……私はカードを二枚セットし、ターンを終了します」

「私のターン、ドロー！」

試験官は手札のカードを二枚伏せるとターンを終え、それを聞いたエルフィはカードをドローする。するとその瞬間試験官が動いた。

「リバースカードオープン、永続罠［スキルドレイン］を発動します！　ライフ１０００ポイントをコストに発動し、フィールド上全ての効果モンスターの効果を無効とします！」ＬＰ４０００→３０００

スキルドレイン
永続罠
１０００ライフポイントを払って発動する。

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

「うっ……」

試験官が発動したトラップを見たエルフィは嫌そうな顔をする。これではカウンタートラップを使った時のアルテミスを始めとした防衛天使（バーミッションエンジェル）の効果が使えない。

「……［天空聖者（エンジェルセイント）メルティウス］を守備表示で召喚し、カードを一枚セットしてターンを終了します」

天空聖者メルティウス　守備力：１２００

天空聖者（エンジェルセイント）メルティウス
効果モンスター
星４／光属性／天使族
攻１６００／守１２００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、カウンター罠が発動される度に自分は１０００ライフポイント回復する。
さらに、フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

エルフィの場に新たな防衛天使が姿を現すが、その真価は試験官のカードによって封じられたままエルフィはターンを終了した。

「私のターン、ドロー。私は［ゴブリン突撃部隊］を攻撃表示で召

喚し、バトル！　電動刃虫でアルテミスを、ゴブリン突撃部隊でメルティウスを攻撃！」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００

ゴブリン突撃部隊
効果モンスター
星４／地属性／戦士族
攻２３００／守０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、
次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「くっ……この戦闘による発動カードはありません、よって二体のモンスターは破壊されます」

電動刃虫のチェーンソーとなった顎が豊穣の天使を斬殺し、ゴブリンの大群が天空聖者を滅多打ちにする。幸い二体の天使は守備だったためダメージは通らなかったもののエルフィの場は全滅だ。

「よし、バトルフェイズを終了しメインフェイズ２に移行します。一応説明を挟みましょう、電動刃虫は戦闘を行ったダメージステップ時に相手に一枚のカードドローを許す効果がありますがそれはスキルドレインによって無効化されます。そしてゴブリン突撃部隊は攻撃を行ったバトルフェイズ終了時に守備表示に強制変更する効果がありますがこれもまたスキルドレインによって無効となります。メインフェイズ２、私はカードを一枚伏せてターンを終了します」

簡易状況説明
エルフィ：ＬＰ４０００　手札四枚
フィールド：モンスターなし　伏せカード一枚

試験官：ＬＰ３０００　手札一枚
フィールド：電動刃虫、ゴブリン突撃部隊全て攻撃表示　スキルドレイン発動中、伏せカード二枚

試験官の場に新たなカードが伏せられる。それらの様子をライとアルフは観客席に当たる席で見守っていた。

「やばそうだね、エルフィ」

「まあな。手札は大分温存してるし……きっと次あたり来るぜ？」

アルフの言葉にライは不敵な笑みを浮かべながらそう言い、それにアルフはふっと笑って返すと二人はエルフィの方を見直した。

「私のターン、ドロー」

「この瞬間、先ほど伏せたリバースカードを発動します！　永続罠［最終突撃命令］！　全ての表側表示モンスターは攻撃表示になり表示形式の変更を行えません！」

最終突撃命令
永続罠

このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

エルフィがカードをドローすると試験官はさっきのターン伏せたカードを発動、それによりエルフィは守備をも封じられてしまった。

「手札から［強欲な壺］を発動し、その効果でカードを二枚ドロー！　よし。手札から速攻魔法［サイクロン］を発動！　その効果でスキルドレインを破壊します！」

強欲な壺
通常魔法
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

「むぅっ！」

エルフィの発動したカードから放たれた竜巻がモンスターの効果を封じるカードを木っ端微塵に砕き、それに試験官はむっと声を出す。その次の瞬間エルフィの背後に城が出来上がった。

「そして永続魔法［神の居城―ヴァルハラ］を発動！　私の場にモンスターが存在しない時、一ターンに一度だけ手札から天使族モンスターを一体特殊召喚出来る。私は［アテナ］を特殊召喚！」

アテナ　攻撃力：２６００

「なんと！？」

サイクロン
速攻魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。

神の居城－ヴァルハラ
永続魔法
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

神の住まう城から最上級天使―アテナが姿を現す。それからエルフィはもう一枚手札を取った。

「そして［勝利の導き手フレイヤ］を召喚！　フレイヤは私の場の天使の攻撃力、守備力を４００ポイント上昇させます！　そしてフレイヤを召喚した時アテナの効果発動！　天使が召喚、反転召喚、特殊召喚された時相手に６００ポイントのダメージを与える！　ジャッジメント・レイ！」

「ぐうぅっ！」ＬＰ３０００→２４００

アテナ　攻撃力：２６００→３０００
勝利の導き手フレイヤ　攻撃力：１００→５００

アテナ

効果モンスター
星７／光属性／天使族
攻２６００／守８００
１ターンに１度、「アテナ」以外の自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスター１体を墓地へ送る事で、「アテナ」以外の自分の墓地に存在する天使族モンスター１体を選択して特殊召喚する。
フィールド上に天使族モンスターが召喚・反転召喚・特殊召喚された時、相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

勝利の導き手フレイヤ
効果モンスター
星１／光属性／天使族
攻　１００／守　１００
自分フィールド上に「勝利の導き手フレイヤ」以外の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、このカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する天使族モンスターの攻撃力・守備力は４００ポイントアップする。

「まだまだいきます！　永続魔法［コート・オブ・ジャスティス］！　私の場にレベル１の天使が存在する時手札から天使族モンスターを特殊召喚できる。私の場にはレベル１の天使、フレイヤが存在します！」

エルフィの場にさらなる永続魔法が姿を現す。そしてエルフィが手札の一枚を手に取った瞬間フィールドに天から光が差した。

「華麗なる金星よ、この場に降臨し光輝け！　［Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ］！！　アテナの効果で６００ダメージ、ジャッジメント・レイ！」

「ぐうぅっ！」ＬＰ２４００→１８００

華麗なる光を放ちながら華麗なる金星の天使がフィールドに降り立ち、アテナの放った光線が試験官を襲う。そしてＶＥＮＵＳ光を浴びた試験官のモンスターが力を失っていった。

「ＶＥＮＵＳはフィールドの存在する限り天使以外のモンスターの攻撃力・守備力を５００ポイントダウンさせます。そしてフレイヤの効果でＶＥＮＵＳの攻撃力・守備力が上昇！」

電動刃虫　攻撃力：２４００→１９００
ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００→１８００
Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ　攻撃力：２８００→３２００

コート・オブ・ジャスティス
永続魔法
自分フィールド上にレベル１の天使族モンスターが表側表示で存在する場合、手札から天使族モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
「コート・オブ・ジャスティス」の効果は１ターンに１度しか使用できない。

Ｔｈｅ　ｓｐｌｅｎｄｉｄ　ＶＥＮＵＳ
効果モンスター

星８／光属性／天使族
攻２８００／守２４００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に表側表示で存在する天使族以外の全てのモンスターの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする。
また、自分がコントロールする魔法・罠カードの発動と効果は無効化されない。

「むぅぅっ！」

「先生、私のデッキを【エンジェル・パーミッション】って言いましたよね？　残念でした。私のデッキは言わばエンジェル・パーミッションとヴァルハラの混合デッキ。エンジェル・パーミッションで防ぎ、ヴァルハラやコート・オブ・ジャスティスで上級天使を呼び出し攻める。一個間違ったら手札事故で何も出来なくなるけどそうならないように気をつけて構築してますから」

試験官の表情が変わり、エルフィはにこっと微笑んでそう言う。そしてキッとした表情で試験官の場を指した。

「これで終わりです！　アテナで電動刃虫を攻撃！！」

「その攻撃宣言の瞬間リバースカードを発動します！　トラップ発動、［聖なるバリア―ミラーフォース―］！　あなたの攻撃表示モンスターは全て破壊されます！」

「パーミッションを舐めないでよね！　カウンタートラップ発動［魔宮の賄賂］！　魔法・罠の発動を無効にして破壊し、相手は一枚カードをドローする！」

「なっ！？」

聖なるバリアーミラーフォース
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

魔宮の賄賂
カウンター罠
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
相手はデッキからカードを1枚ドローする。

槍を手に突撃するアテナの前に聖なるバリアが張られるがそれはエルフィが瞬時に発動したカードの力によって消滅し、アテナは槍を構えて電動刃虫の前に立つ。

「くらいなさい、アイギス・スピア！！」

「ぐぉっ！！」ＬＰ１８００→７００

「ダメージステップに電動刃虫の効果で一枚ドロー。これで終わりです！　ＶＥＮＵＳでゴブリン突撃部隊を攻撃、ホーリー・フェザー・シャワー！！！」

「うおおおぉぉぉぉっ！！！」ＬＰ７００→０

華麗なる金星の天使から放たれた聖なる羽がゴブリン目掛けて降り

注ぎ、それが試験官まで貫通してライフポイントを削り取る。それが試験官への止めとなり、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「私の勝ちですね。ありがとうございました」

「ああ、いいデュエルだった」

エルフィはよしっと小さくガッツポーズを取った後ぺこりと頭を下げてそう言い、それに試験官もああと頷くとエルフィはもう一度礼をしてからデュエル上を降りていきライ達の待つ席へと戻っていき、二人を見るとにこりと笑みを浮かべる。

「ちょっと危なかったわ」

「嘘こけ」

エルフィの言葉にライがさらっと返し、エルフィはあらっと肩をすくめて返す。それからまた少し時間が過ぎ、放送が聞こえてくる。

「次！　受験番号４７番！！」

「あ、僕だ」

「頑張れよー」

試験官の放送にアルフはそう言って席を立ち、ライがそう言うとアルフはうんと頷いてデュエル場へと向かう。

「受験番号４７番空時アルフ！　よろしくお願いします！」

「？……あ、ああ。よろしく頼む、今出来る全力でかかってきなさい」

アルフの言葉に試験官は一瞬首を傾げるが我に返ったように頷くとそう言い、二人はデュエルディスクを構える。

「「デュエル！！」」

「私の先攻、ドロー！」

掛け声の直後試験官がドローを行い、素早く手札を見るとその内の一枚を手に取った。

「私は［ゴブリン突撃部隊］を攻撃表示で召喚！　カードを三枚セットしてターン終了です」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００

「僕のターン、ドロー」

「リバースカード発動［最終突撃命令］！　フィールド上の表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できません！」

ゴブリン突撃部隊
効果モンスター
星４／地属性／戦士族
攻２３００／守０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する

事ができない。

最終突撃命令
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

いきなり永続罠の発動、しかしアルフは慌てる様子を微塵も見せずに落ち着いて手札を見た。

「……僕は［グリーン・ガジェット］を召喚し、効果発動。デッキから［レッド・ガジェット］を一枚手札に加えます。そして手札の［マシンナーズ・フォートレス］と［レッド・ガジェット］を捨てて、墓地から［マシンナーズ・フォートレス］を特殊召喚！　マシンナーズ・フォートレスは手札から機械族モンスターをレベル合計が8以上になるよう捨てる事によって手札または墓地から特殊召喚できます」

グリーン・ガジェット　攻撃力：１４００
マシンナーズ・フォートレス　攻撃力：２５００

グリーン・ガジェット
効果モンスター
星４／地属性／機械族
攻１４００／守６００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「レッド・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

レッド・ガジェット
効果モンスター
星４／地属性／機械族
攻１３００／守１５００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「イエロー・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

マシンナーズ・フォートレス
効果モンスター
星７／地属性／機械族
攻２５００／守１６００
このカードは手札の機械族モンスターをレベルの合計が８以上になるように捨てて、手札または墓地から特殊召喚する事ができる。
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
また、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが相手の効果モンスターの効果の対象になった時、相手の手札を確認して１枚捨てる。

「さらに永続魔法［機甲部隊の最前線（マシンナーズ・フロントライン）］を発動！　そしてバトル、マシンナーズ・フォートレスでゴブリン突撃部隊を攻撃、マシンナーズ・ブラスター！」

「リバースカードを発動します、速攻魔法［収縮］！　その効果によりマシンナーズ・フォートレスの元々の攻撃力を半分にします！」

「！？」

機甲部隊の最前線（マシンナーズ・フロントライン）
永続魔法
機械族モンスターが戦闘によって破壊され自分の墓地へ送られた時、そのモンスターより攻撃力の低い、同じ属性の機械族モンスター１体を自分のデッキから特殊召喚する事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

収縮
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

マシンナーズ・フォートレス　攻撃力：２５００→１２５０

「これで攻撃力は逆転しました、返り討ちです！」

「くっ！……でも、マシンナーズ・フォートレスの効果発動！　このカードが戦闘によって破壊された時相手フィールド上に存在するカード一枚を選択し、破壊する。それにチェーンして機甲部隊の最前線の効果発動、それにより僕はマシンナーズの攻撃力２５００以下で同じ属性である地属性の機械族［マシンナーズ・ギアフレーム］を攻撃表示で特殊召喚！　そしてチェーン１のマシンナーズ・フォートレスの破壊効果により僕はゴブリン突撃部隊を破壊します！」
ＬＰ４０００→２９５０

「ぐぅっ！」

突然マシンナーズ・フォートレスの全長が半分程度に収縮し、その状態で放たれた小さな砲撃にゴブリン突撃部隊の一部が吹っ飛ばされたものの戦闘を行う分には問題なし、一瞬でマシンナーズ・フォートレスを取り囲んでぼこぼこにするがその次の瞬間アルフの場に新たなマシンナーズが姿を現し、そう思ったらマシンナーズ・フォートレスは自爆。ゴブリン突撃部隊を道連れにした。

マシンナーズ・ギアフレーム　攻撃力：１８００

マシンナーズ・ギアフレーム
ユニオンモンスター
星４／地属性／機械族
攻１８００／守０
このカードが召喚に成功した時、自分のデッキから「マシンナーズ・ギアフレーム」以外の「マシンナーズ」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとして自分フィールド上の機械族モンスターに装備、または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
（１体のモンスターが装備できるユニオンは１枚まで。
装備モンスターが破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する。）

「そしてグリーン・ガジェットとマシンナーズ・ギアフレームでダイレクトアタック！」

「そうはいきません！　リバースカード発動［リビングデッドの呼び声］！　墓地から［ゴブリン突撃部隊］を攻撃表示で特殊召喚し

ます！」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００

リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地のモンスター１体を選択し、表側攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「っつ！　まき戻しにより攻撃を中止し、リバースカードを一枚セットしてターンを終了します」

「ふむ、私のターン。ドローです」

アルフは復活した部隊を見て息を飲むと攻撃を中止し、カードを二枚伏せるとターンを終える。それを聞いた試験官はふむと呟いてカードをドローし、それを見た。

「私は［電動刃虫（チェーンソー・インセクト）］を攻撃表示で召喚！　バトルフェイズに入ります！」

電動刃虫　攻撃力：２４００

電動刃虫（チェーンソー・インセクト）

効果モンスター
星４／地属性／昆虫族
攻２４００／守０
このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード１枚をドローする。

「ゴブリン突撃部隊でグリーン・ガジェットを攻撃！」

「ぐぅっ！　機甲部隊の最前線の効果を発動！　グリーン・ガジェットの攻撃力１４００以下の地属性機械族、［レッド・ガジェット］を攻撃表示で特殊召喚し、レッド・ガジェットの効果発動！　デッキから［イエロー・ガジェット］を手札に加えます」ＬＰ２９５０→２０５０

レッド・ガジェット　攻撃力：１３００

イエロー・ガジェット
効果モンスター
星４／地属性／機械族
攻１２００／守１２００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、デッキから「グリーン・ガジェット」１体を手札に加える事ができる。

「ふむ……このターンで倒しきれるわけでもなし、何も電動刃虫の攻撃でこれ以上あなたの手札を増やし逆転の可能性を増やす必要もないですね。バトルフェイズ終了、ゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備表示に変更されますが、最終突撃命令の効果により直後

攻撃表示に変更されます。私はカードを一枚セットしてターンを終了します」

「僕のターン、ドロー！　よし！　僕はレッド・ガジェットとマシンナーズ・ギアフレームを生贄に捧げます！」

「なんですと！？」

アルフの宣言に試験官が声を上げる。そして二体の機械が闇に包まれ、巨大な機械の球体がその場に具現する。

「巨大なる土星よ、今こそ汝起動の時！　来い、［Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ］！！」

その球体の内部からロボットのように頭が現れ、どこからともなく巨大な両腕が飛んでくる。そして最後に球体の周りに輪が具現した。

Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ　攻撃力：２８００

「いきます、ＳＡＴＵＲＮで電動刃虫を攻撃！　アンガー・ハンマー！！」

「させません！　その攻撃宣言時にリバースカードオープン［聖なるバリアーミラーフォースー］！！　相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊します！」

Ｔｈｅ　ｂｉｇ　ＳＡＴＵＲＮ
効果モンスター
星８／闇属性／機械族

攻２８００／守２２００
このカードは手札またはデッキからの特殊召喚はできない。
手札を１枚捨てて１０００ライフポイントを払う。エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。この効果は１ターンに１度だけ自分のメインフェイズに使用する事ができる。
相手がコントロールするカードの効果によってこのカードが破壊され墓地へ送られた時、お互いにその攻撃力分のダメージを受ける。

聖なるバリア－ミラーフォース
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

ＳＡＴＵＲＮは浮遊している巨大な両腕をチェーンソーの顎を持つ昆虫に叩きつけようとするがその一撃は聖なるバリアに防がれ、その衝撃を跳ね返されＳＡＴＵＲＮの身体にヒビが入り、その巨体が爆発する。

「……な、なんですと！？」ＬＰ４０００→０

爆発によって発生した煙のソリッドヴィジョンに包まれる中試験官はデュエル終了のブザーが鳴り響くのを聞き、直後自らのライフポイントがゼロになっている事に気づいて声を上げた。すると煙の向こうからアルフの声が聞こえてくる。

「ＳＡＴＵＲＮの効果です。ＳＡＴＵＲＮには相手がコントロールするカード効果によって破壊され墓地へ送られた時、お互いのプレイヤーはその攻撃力分のダメージを受けるという効果があるんです

よ」

「し、しかし！　ＳＡＴＵＲＮの攻撃力は２８００、私のライフは４０００なのでダメージを受けたとしても１２００残ります！　そもそもそのダメージを受けたらライフポイントが０になり敗北するのは残りライフが２０５０であるあなたではないですか！？」

アルフの説明を聞いた試験官は驚愕の声でそう叫ぶ。そして煙が消えていきアルフの姿が試験官の目に映る。彼のフィールドには一枚のカードが翻っていた。

「ＳＡＴＵＲＮが破壊され効果が発動した時リバースカードを発動しました。カウンタートラップ［地獄の扉越し銃］、その効果はダメージを与える効果が発動した時、そのダメージを相手に与える。これにより僕が受けるはずだったダメージ２８００が丸ごと先生に移り、先生は２８００×２、つまり５６００のダメージを受けたというわけです」

地獄の扉越し銃
カウンター罠
ダメージを与える効果が発動した時に発動する事ができる。
自分が受けるその効果ダメージを相手に与える。

「な、なんという恐ろしいコンボ……」

「これが僕の必殺即死コンボ、ダブル・インパクト。じゃ、僕の勝ちですね。ありがとうございました」

アルフの説明を聞いた試験官は顔をしかめながらそう呟き、アルフは不敵な笑みを浮かべて説明を終えるとにこっと無邪気な微笑みを浮かべて続けてぺこりと頭を下げ、デュエル場を降りていった。そしてアルフはライ達の待つ席へと戻る。

「よっ。久しぶりに見たな、ダブル・インパクト」

「まさかいけるとは思わなかったけどね。やっぱこのコンボ決まると気持ちいいや」

ライの言葉にアルフはあははと笑いながら返して席に座る。と次にエルフィが口を開いた。

「さて、私とアルフが勝ったんだから後はライだけよ。一人だけ不合格になるなんて止めてよね？」

「分かってるって」

エルフィの言葉にライが笑いながら返していた時、放送が聞こえだす。

「受験番号６５番！」

「お、来た来た、んじゃ行ってきまーす」

それを聞いたライは自分の受験票を確認するとヒラヒラと手を振って言いながら席を立ち、デュエル場へと向かう。

「受験番号６５番、空時ライ！　よろしくお願いします！！」

「空時……すまないが、君には兄弟がいるかな？」

ライが元気良く名乗ると試験官が尋ね、それにライはうんと頷いた後気づいたように笑う。

「あぁ、先生エルフィとアルフの相手をした人だよね？　アルフは俺の双子の弟で、エルフィは幼なじ……従姉弟なんだ」

「なるほど……面白い偶然もあるものだ」

「へへへっ、んじゃ空時三人三連勝といかせてもらいますね！」

「そうはいかない！　今出来る全力でかかってきなさい、私も今出来る全力でそれを撃ち砕く！」

ライの説明を聞いた試験官は納得したように頷き、ライはへへっと笑いながらそう返す。しかし試験官もふっと笑ってそう言うと二人はニヤリと笑い合ってデュエルディスクを展開する。

「「デュエル！！！」」

そして二人の声が響き渡り、直後カードをドローしたのはライだった。

「先攻はもらうね！　ドロー！……俺は［クリッター］を守備表示で召喚し、カードを一枚セットしてターンを終了します」

クリッター　守備力：６００

クリッター
効果モンスター
星３／闇属性／悪魔族
攻１０００／守６００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。

ライの場に三つ目で毛むくじゃらの悪魔が姿を現し、その後ろに一枚のカードが伏せられる。それから彼はターンを終了した。

「私のターン、ドローです。私は［ゴブリン突撃部隊］を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズに入ります！　ゴブリン突撃部隊でクリッターを攻撃！」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００

ゴブリン突撃部隊
効果モンスター
星４／地属性／戦士族
攻２３００／守０
このカードは攻撃した場合、バトルフェイズ終了時に守備表示になり、次の自分のターンのエンドフェイズ時まで表示形式を変更する事ができない。

「ちっ……墓地に送られたクリッターの効果発動！　このカードが墓地に送られた時、デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを一体手札に加える。俺は［魔轟神ガルバス］を手札に加える！」

魔轟神ガルバス
効果モンスター
星４／光属性／悪魔族
攻１５００／守　８００
手札を１枚墓地へ捨てて発動する。
このカードの攻撃力以下の守備力を持つ、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。

「ふむ……バトルフェイズ終了時にゴブリン突撃部隊は守備表示に変更となります。私はリバースカードを二枚セットして、ターンを終了します」

ゴブリン突撃部隊　守備力：０

「っと待った！　その前のエンドフェイズにリバースカードオープン速攻魔法［終焉の焔］！　俺の場に黒焔トークンを二体特殊召喚する！　このトークンは闇属性モンスター以外の生贄召喚の生贄には出来ない」

黒焔トークン×２　守備力：０

終焉の焔
速攻魔法
このカードを発動するターン、自分は召喚・反転召喚・特殊召喚する事はできない。

自分フィールド上に「黒焔トークン」（悪魔族・闇・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは闇属性モンスター以外のアドバンス召喚のためにはリリースできない。

「なるほど、改めてターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！　そして二体の黒焔トークンを生贄に捧げる！」

試験官はライの場で小さく燃える黒い焔の悪魔を見るとふむと頷いてターンを終え、それを聞いたライは力強くカードをドローした後間髪入れずにそう宣言する。それと同時に黒い焔がさらに巨大な黒い球体に吸い込まれ、球体も炎を放ち始める、それはまるで小さな黒き太陽のように。

「汝は没する事無く、無限に出づる至高の太陽！　闇より昇れ！！
［Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ］！！！」

Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ　攻撃力：３０００

Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族
攻３０００／守３０００
このカードはこのカードの効果でしか特殊召喚できない。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、次のターンのスタンバイフェイズ時、手札を１枚捨て

る事で、このカードを墓地から特殊召喚する。

ライの口上と共に黒い太陽の中から太陽の名を冠する悪魔がその姿を現し、ライのフィールドに降り立つ。

「いくぜ、ＳＵＮでゴブリン突撃部隊を攻撃、ソーラー・フレア！！」

「この瞬間、リバースカードを発動します！　トラップ発動［聖なるバリアーミラーフォース―］！　そのモンスターには消えてもらいます！」

聖なるバリアーミラーフォース
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「うおおぉぉっ！！？？」

ＳＵＮの放った太陽の炎は聖なるバリアに跳ね返されてＳＵＮ自身を燃やし尽くす。それにライは驚いたように声を上げた。

「っちゃー、ターンエンド……」

「ふふふ、私の場に存在するモンスターはゴブリン突撃部隊のみ、そしてゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備表示に変更された次のターンのエンドフェイズ時まで表示形式の変更は不能。それな

らば安心とでも思いましたか？　甘いですね、そちらのエンドフェイズにリバースカード発動、永続罠［最終突撃命令］！！　フィールド上全てのモンスターは攻撃表示となる、つまりゴブリン突撃部隊も攻撃表示に変更されます！」

ゴブリン突撃部隊　攻撃力：２３００

「わお……」

最終突撃命令
永続罠
このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上に存在する表側表示モンスターは全て攻撃表示となり、表示形式は変更できない。

攻撃後の休憩状態、守備表示へとなっていたゴブリン達は突然の突撃命令を聞いて攻撃状態へと移り、それを見たライはそう呟く。ターンは既に試験官へと移っていた。

「私のターンです、ドロー！……私は［電動刃虫（チェーンソー・インセクト）］を攻撃表示で召喚し、バトルフェイズに入ります！　これで終わりですね、ゴブリン突撃部隊でダイレクトアタック！」

電動刃虫（チェーンソー・インセクト）　攻撃力：２４００
効果モンスター
星４／地属性／昆虫族

攻２４００／守０
このカードが戦闘を行った場合、ダメージステップ終了時に相手プレイヤーはカード１枚をドローする。

「ぐぅっ！！　だが、手札の［冥府の使者ゴーズ］の効果発動！
俺の場にカードが存在しない時に相手のカードによってダメージを受けた時、手札から特殊召喚する！　そして戦闘ダメージを受けた事による特殊召喚の場合受けた戦闘ダメージと同じ数値の攻撃力・守備力を持つカイエントークンを特殊召喚する！　冥府より現れろ、ゴーズ！　カイエン！」ＬＰ４０００→１７００

冥府の使者ゴーズ　攻撃力：２７００
冥府の使者カイエントークン　攻撃力：？→２３００

冥府の使者ゴーズ
効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族
攻２７００／守２５００
自分フィールド上にカードが存在しない場合、
相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。
●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」
（天使族・光・星７・攻／守？）を１体特殊召喚する。
このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。

●カードの効果によるダメージの場合、
受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

「ふむ。ならば……電動刃虫でカイエントークンを攻撃します！」

「ちっ、電動刃虫の効果によりダメージステップ終了時にカードを一枚ドロー」ＬＰ１７００→１６００

「バトルフェイズ終了、ゴブリン突撃部隊は自身の効果により守備表示になりますがその直後最終突撃命令の効果により攻撃表示に変更されます。私はリバースカードを一枚セットしてターンを終了します」

「俺のターン、ドロー！」

試験官はリバースカードを一枚セットするとターンを終え、それを聞いたライはカードをドローする。するとライはデュエルディスクを縦に構えてにやりと笑った。

「太陽は一度沈んでも次の日にはまた昇る。それはＳＵＮにも受け継がれているんだ」

「なんですと！？」

「ＳＵＮの効果発動！　破壊された次のスタンバイフェイズ、手札を一枚捨てる事により、このカードは墓地から特殊召喚される！再び立ち昇れ、［Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ］！！」

Ｔｈｅ　ｓｕｐｒｅｍａｃｙ　ＳＵＮ　攻撃力：３０００

ライが手札を一枚捨てると共にフィールドに再び黒い太陽が浮かび上がり、その中からＳＵＮが姿を現しフィールドへと降り立つ。

「まだまだ！　俺は［魔轟神ガルバス］を攻撃表示で召喚し、手札を一枚捨ててガルバスの効果発動！　ガルバスの攻撃力以下の守備力を持つ、相手フィールド上の表側表示モンスター一体を破壊する。守備力０の電動刃虫を破壊！」

魔轟神ガルバス　攻撃力：１５００

「ぐぅっ！！」

ライの場に現れた悪魔は手に持っていた棘付き鉄球の鎖を振り回し、鉄球を電動刃虫に叩きつけ押し潰す。

「いくぜ、冥府の使者ゴーズでゴブリン突撃部隊に攻撃！」

「ぐぅっ！」ＬＰ４０００→３６００

「さらに、魔轟神ガルバスでダイレクトアタック！」

「ぐふぅっ！！」ＬＰ３６００→２１００

冥府の使者が手に持っていた剣一本でゴブリンの部隊を殲滅し、そこにガルバスが試験官目掛けて鉄球を叩きつける。

「これでトドメ！　ＳＵＮでダイレクトアタック！！　ソーラー・フレア！！！」

「ぐおおおぉぉぉぉっ！！！」ＬＰ２１００→０

ライの指示と共に放たれた光線が試験官に止めをさし、デュエル終了を示すブザーが鳴り響いた。

「っしゃー！　空時三人三連勝達成！　ありがとうございました！！」

ライは右手を掲げてそう叫び、ぺこりと頭を下げてお礼を言ってからデュエル場を降り、席へと戻っていく。

「いえーいっ！　三連勝達成だな！」

「全くもう、ゴーズがあるとは思ってたけど冷や冷やしたよ」

「もしゴブリンをリリ……生贄に偉大魔獣ガーゼットでも召喚されたらどうするつもりだったの？」

「ま、そこはそれ。実は手札にクリボーいたから、万が一があっても一回は耐えられる計算だったよ」

ライの能天気な声にアルフとエルフィはため息混じりに返し、エルフィの言葉にライはたははと笑ってそう返す。それから三人が色々と話していると突然聞こえてきた声が耳に入る。

「いけ、フレイム・ウィングマン！　古代の機械巨人に攻撃！　スカイスクレイパー・シュート！」

「マンママミーヤ！　私が古代の機械巨人が！！」

「「「あ！！！」」」

話し込んでいたせいで十代が来ていたのに気づいていなかったどころかデュエルすら見逃していた。三人が気づいた時には既にデュエルは終了、十代はいえーいっとガッツポーズを取っていた。

「あっちゃー……うっかりしてたね」

「不覚だったわ。話に夢中で周りの気配に気を回すの忘れてた」

「ま、しょうがないだろ。原作通り勝った事だし多分皆合格だろ、十代と話すのはアカデミアに入ってからにしようぜ」

アルフの言葉にエルフィが残念そうに言うとライは両手を後ろに回しながら続ける。それから三人は入学実技試験終了のアナウンスを聞くと試験場を後にし、家に帰っていった。

第一話　入学試験デュエル（後書き）

第一話は入学試験デュエル、ちなみにこの小説にはＧＸ世界観ながらシンクロが普通に出ます。理由はメリオルがカードデザイナーとしてインダストリアル・イリュージョン社に入社しているため。ちなみにスターダストやレッド・デーモンズのような５Ｄ，ｓの特別なカードは自重しますがＺＥＸＡＬのキーカードことＮｏ．は一切の自重無く使用する予定なのでご了承ください。

……にしても疲れた……流石に第一話から三連戦はきつい……。

レオ「しかも試験官は全員一緒という手抜き具合」

三人も思いつかねえもん、攻撃力の高いモンスターでビートダウン、分かりやすいでしょ？　さあ次回から学園生活のスタートです。

レオ「さあ今回はどんなプレイングミスをしてるかな？」

しつけえよ！！！　ま、まあ、それでは！

第二話　入学、そして顔合わせ

「うぉー！！　すっげー速ぇー！　ヘリコプターってこんな速いのかー！？」

「ライ！　ライ！　あれ鯨じゃねえか！？」

「え！？　どこだどこだ！？」

「ほらあそこあそこ！　ってあーくそっ、見えなくなった！！」

「……兄さんはもう……」

「恥ずかしい……」

アカデミアへと向かう高速ヘリ、デュエルアカデミアへの入学試験という狭き門を潜り抜けた新入生はこの船に乗り、太平洋の孤島に設置されたデュエルアカデミアへと続々と向かっていた。本来ならば新たな生活に対する期待や不安、緊張が少なからず現れるであろうそんな中でライは海の上を疾走する高速ヘリにテンションを上げており、その近くに座っていた少年――この物語の主人公である遊城十代。同じヘリに乗った時似たもの同士なのかライと一瞬で意気投合していた――と一緒に窓の外を見て騒ぎまくり、アルフとエルフィは、アルフはため息をつきエルフィは両手で顔を押さえながらそう呟いていた。

「まあ、人懐っこくて誰ともすぐ仲良くなれるのが兄さんの、ライのいいとこだよね」

「確かに」

アルフは自分達の後ろに乗っているライの方を見てくすっと笑いながら続け、エルフィも微笑みながらそう返した。

それからヘリはアカデミアに到着し、新入生は校長先生から挨拶を受ける。それが終わって新入生は制服に着替え、学園で使う特別端末ＰＤＡを貰って外に出る。そして十代はピッピッとＰＤＡを操作しながら口を開いた。

「ふーん、これから俺達が生活する寮は三つに分けられてるのか……俺はオシリスレッド、ライは？」

「俺もレッドだった」

「あ、僕もレッドだったッス。えと、十代君とライ君だったっけ？丸藤翔ッス、よろしくね」

「おう。んでアルフは？」

「レッドだよ。イエロー行けたと思ったのに、思ったよりレベル高いのかな？」

十代は自分の寮を確認してからライに尋ね、ライもそれに返すとその近くにいた少年――丸藤翔――が声を出す。それにライはこくんと頷いて返してからアルフに尋ね、それにアルフも微笑みながら返す。

「ああ、一番君」

「やあ二番、お前もレッドか？」

するとそこに黄色い制服を着た少年が現れ、十代に声をかける。それに十代が尋ねると彼は自分の制服に手を当てた。

「いや、俺はこの制服で分かるだろう？　俺はラーイエローだ」

「制服？　ああ、この色ってそういう意味なのか？」

少年の言葉に十代は自分の制服を見ながらそう呟き、それに少年は頷いた。

「まあな。ああ、名乗ってなかったな。俺は三沢大地、よろしく頼む。それにしても、遊城十代、空時ライにその弟の空時アルフだったな？　君達がレッドだというのが不思議だよ」

「ん？　どういう意味だ？」

「ああ、気にしないでくれ。ああそれと君達の寮はあっちの方だ、では失敬」

少年――三沢の言葉に十代が首を傾げ、それを聞いた三沢は少し笑いながらそう言った後一つの方向を指差し、それから歩き去っていく。それから彼らの近くに立っていた少女――エルフィも歩き出す。

「じゃあ、私も女子寮に行くからこの辺で。また後でね」

「おう。道中気をつけろよ」

「はいはい。じゃまたね」

エルフィの言葉にライがそう言うと彼女はくすくすと笑いながら返して歩き去る。それを一行が見送ってから十代が口を開いた。

「んじゃ、俺達も行くか。えーっと、三沢が言ってたのはあっちだったな。行こうぜ」

十代がそう言って走り出すとライやアルフ、翔も急いでその後を追い、走り出す。それからメンバーの前に広がったのは……。

「えーっと……ここがオシリスレッドの寮？」

最初に口を開いたのは翔、彼らの目の前にあったのはどっからどう見ても築十数年は立ってそうな外見のボロイ二階建ての木造アパートだった。

「うわぁ、アニメで飽きるほど見てたけど……」

「生で見ると凄いな……」

「え？　どういう意味ッスか？」

「あ、いやいやこっちの話。えと、ほら、ホームページか何かに載ってなかった？　それと実際に見るのとじゃやっぱ違うなーって」

「へー……」

アルフとライの呟きを聞いた翔が不思議そうに尋ねるとアルフははははと笑いながら誤魔化し、それを聞いた翔は首を傾げる。

「でも俺は好きだな、眺めもいいし……おっ！　鯨だ！」

「マジか！？」

階段を上がり、寮のすぐ後ろに広がる海を見ながら十代が言い、声を上げるとライがダダダと階段を駆け上がる。

「えーっと、ああ、翔君は十代君と同じ部屋だね。えーっと……ああ、あそこだ。三人相部屋で、前田隼人君っていう人と相部屋なんだって」

「ありがと。アルフ君は僕達の隣、あの隅の部屋でお兄さんと同部屋なんすね。でも少し狭いみたいッス」

「建築費の関係で一つだけ二人部屋のスペースになっちゃって、僕達は兄弟なんだからってそこを割り当てられたみたい。まあ実家でも二人部屋だったし慣れてるよ」

アルフがＰＤＡに載っている部屋の割り当てを見てそう言うと翔はお礼を言い、そのお返しにか彼らの部屋を調べる。その言葉にアルフは笑いながら返し、翔も「そうッスか」と返した。それから海を見て歓声を上げている十代とライをそれぞれ翔とアルフが連れて行き、それぞれの部屋に入った。

「ふー。二人部屋か、下手に他人に入られなくてよかったって言うべきか？」

「ま、そうかもね。おちおち秘密の話も出来やしないし」

ライとアルフは部屋に荷物を置きながらそう話し合う、と部屋のド

アががちゃっと開けられた。そこに立っていたのは元気一杯の十代とず～んと落ち込み状態の翔だった。

「ライ！　アルフ！」

「おう十代、どした？」

「探検しようぜ、探検！」

「おう！」

十代の提案にライは笑いながら返し、それから四人は学校の方に歩きながらライと十代はデュエル談義で盛り上がり、アルフは後ろでそれをちらりと見た後翔の方を見た。

「で、翔君はなんでそんなに落ち込んでるの？」

「さっき、相部屋の隼人君に聞いたんだけどね、レッド寮のレッドは危険域（レッド・ゾーン）って意味で、高等部から入学してきた中で成績不振者を集められたんだってさ……あ、オベリスクブルーは中等部からの成績優秀生、ラーイエローは高等部入学者の中で成績優秀な人を集めたんだってさ……つまり、僕達は成績不振者のドロップアウトって意味なんすよ……」

アルフの問いに翔が落ち込みながら返す。するとそれにアルフはくすくすと笑った。

「な、何が可笑しいんすか！？」

「だって、ブルーはともかくとしてもイエローとレッドの違いなん

てつまりはたかだか入学試験の結果でしょ？　入ったもんが勝ち、レッドが最低の寮って事は逆に言えばこれ以上は下がらない。後は上がっていけばいいだけだよ。日本にはいい言葉がある……［窮鼠猫を噛む］」

「僕達ネズミ！？」

「冗談だよ。背水の陣ってよく言うじゃない、ほら前を見てみなよ、十代君なんて全然気にしてないっぽいよ」

突然笑い出したアルフに翔が叫ぶとアルフは笑いながらそう言い、その最後の言葉に翔が声を上げるとアルフは冗談だよと付け加えてから続け、翔は前を見る。確かに自分と同じ話を聞いていたはずの十代は全然落ち込む様子を見せていなかった。それを聞くと翔はくすりと笑う。

「そうッスね……ありがとう、アルフ君」

「どういたしまして」

翔のお礼の言葉にアルフは微笑みながら返し、と翔はそれを驚いたように見た。

「どうしたの？」

「なんか、アルフ君って……笑うと女の子みたいっすね」

「……」

それを見たアルフが逆に驚いたように尋ねると翔は笑いながら返し、

それを聞いたアルフが今度は落ち込む番だった。

「それ、昔っから言われるんだよ……中学校の学園祭で喫茶店をする時とか僕ウケ狙いで女装させられたんだ、しかも家族以外同じ学校の生徒すら誰も僕だと気づかない有様、フフフフフ……」

「わーごめんッス！　僕が悪かったッスー！！」

アルフの背後に気のせいか黒いオーラが宿り、それに翔は大慌てで両手を合わせて謝り始める。それからなんだかんだでアルフの機嫌が治った後一行はデュエル場へとやってくる。

「あ、ライ」

「お、エルフィ！」

するとデュエル場に入るところで一旦別れていたエルフィと合流、彼女の声かけにライも右手を振って返す。すると彼女の隣に金色の髪を長く伸ばした綺麗な少女が立っているのに気づいた。

「エルフィ、知り合い？」

「うん。幼馴染、じゃなかった。従姉弟のライとアルフ、ここに来る途中で知り合った十代君と翔君」

「そう。初めまして、私は女子ブルー寮所属の天上院明日香。よろしく」

少女――明日香の言葉にエルフィは頷いて彼らを紹介し、それを聞いた明日香は改めて名前を名乗る。それにレッドメンバーが「よろ

しく」と返した。

「んじゃさ、そこデュエル場みたいだし一回デュエルやろうぜ！俺一番乗りー！」

「あ、ずりい！」

十代は言うが早いかデュエル場に駆け上がる。それを見たライがそう叫んでその後を追い、残るメンバーは顔を見合わせて苦笑するとデュエル場に上がっていった。

「あれ？」

するとアルフはすぐに気づく。十代が思いっきりブルー男子の生徒と口喧嘩を行っていた。

「なんでだよ！？　俺達もこの学校の生徒だぜ！　なんでここ使っちゃいけないんだよ！？」

「ここはオベリスクブルー専用リング、言わば俺達のようなエリートの聖域なんだ！　お前ら如きオシリスレッドの奴が来たら空気が汚れるだろうが！」

「その通り、そこを見ろ！」

十代の声にブルー生徒Ａが高説、続けてブルー生徒Ｂがデュエル場の入り口の壁を指差す。それにその場にいた全員が顔を上げるとそこにはオベリスクの巨神兵の顔らしきエンブレムがあった。

「あ、ほんとだ」

「これは知らなかった僕達が悪いッスね。アニキー、寮に帰ろー」
それを見たアルフが呟くと翔は納得したように頷いて十代を呼ぶ。
するとその途端ブルー生徒Ａが目を見開いた。
「あっ、よく見るとお前は、クロノス教諭を倒した遊城十代！？」
「え？　俺のこと知ってんの？」
「ま、万丈目さん！　大変です！　受験番号１１０番、遊城十代です！」
ブルー生徒Ａの言葉に十代がきょとんとするとブルー生徒Ｂが上の方を見て声を上げる。すると客席に寝転がっていた黒髪の少年が起き上がり、気だるそうな目で十代達を見た。
「「「！？」」」
それを見た瞬間ライ達三人に違和感が走る。そして万丈目と呼ばれた少年はデュエル場に下りると十代を見た。
「……お前が遊城十代か。クロノス教諭を実技試験で破ったという噂は聞いている」
「へへっ、実力さ」
万丈目の言葉に十代はぐっとサムズアップをしながら返し、それを見た万丈目はにやりと微笑を浮かべた。

「その実力、見せてもらう。明日の実技授業で俺と戦え。デュエルの場については後で教える。人目のつく場所でやると無粋な邪魔が入らないとは限らんからな」

万丈目は心なしか背後のブルー生徒に気を向けながらそう言い、それに十代はああと頷いた。

「分かった。んじゃ俺のＰＤＡのアドレス教えとくよ」

「ああ」

十代と万丈目はそう言い合うとＰＤＡを取り出して十代は万丈目のＰＤＡにアドレスを送信する。それが終わると明日香が口を開いた。

「ところで、そろそろ新入生歓迎会の時間よ。戻りましょう」

「おっ、そんなのもあるのか？　んじゃ行こうせ、翔、ライ、アルフ」

「あ、うん」

明日香の言葉に十代は顔を輝かせ、翔達に言うがそれに頷いたのは翔のみ。ライとアルフはエルフィに目配せしており、エルフィもうんと頷くとＰＤＡを取り出した。

「あぁ、俺達まだエルフィとアドレス交換してないからさ。先に戻ってて」

「あ、そうか。んじゃ先に行くぜ」

「じゃーねー」

ライの言葉に十代と翔はそう言って走り去っていく。それからエルフィは明日香に話しかけた。

「明日香、私ライ達とアドレス交換ついでに話したいことがあるから。先に戻ってて」

「ええ」

エルフィの言葉に明日香はうんと頷き、三人はデュエル場を出て行く。それから明日香は万丈目の方をちらりと見た。

「遊城十代、あのクロノス教諭を破ったという噂は本当のようね」

「ああ、それも試験用デッキではなくクロノス教諭本来のデッキを破ったとまで言われている。教諭が手加減したという可能性ももちろんあるが、実力は確かだろう」

「ふぅん、面白い子みたいね。遊城十代……」

明日香の言葉に万丈目はにやりと笑いながら返し、それを聞いた明日香はくすくすと笑いながら言ってから歩き出した。

「じゃあ、私もそろそろ戻るわ」

「ああ」

明日香がそう言って歩き出すと万丈目も踵を返して歩き出す。

少し時間を戻してライ達、彼らはデュエル場を出ると人目のない場所に移動して口を開いた。

「おい、見たかあの万丈目」

「うん、確か初期の万丈目ってレッドの生徒をドロップアウトボーイって蔑んでる凄い嫌味なキャラだったはず、なのにここの万丈目ってまるで漫画版みたい……」

「まさかここって漫画版ＧＸ？　あ、でも十代君はアニメ版のフレイム・ウィングマンを使ってたし……」

三人はそう口々に言い、最後にエルフィが言うと黙り込む。そしてライは髪をかきながら口を開いた。

「流石に判断材料が少なすぎるな。一旦寮に戻ろう、アドレスは交換して、何か分かったらメールを送ろう」

「「了解」」

ライの言葉に二人は頷き、三人は互いにアドレスを交換し合う。そしてそれを確認するとライが口を開いた。

「んじゃ、解散。明日の十代と万丈目のデュエル、俺達も観戦させてもらおうぜ」

「そうだね」

ライの言葉にアルフが返し、エルフィはふふっと笑う。それからエルフィは女子寮に、ライとアルフはレッド寮へと向かう。その道中

だった。

「アルフ」

「なぁに？」

「分かってるだろ？」

ライの声にアルフがわざとらしく返すとライは静かに返し、アルフも当然というように頷いた。

「あのブルー生徒二人でしょ？　原作ではなかったけどオリジナルになればどうなるか分からない。万丈目君の気の張りようから考えてブルーの生徒がレッド相手に負けるなんて許さない～とかでブルーの生徒がデュエル中に、特に十代君が優勢になれば乱入してくる可能性は想定しておくべきだね」

「ああ。まあそういうことだ、エルフィにも連絡取っとかないとな」

アルフの予想にライは頷き、ＰＤＡをちらりと見た。もう既にレッド寮は姿を見せている。

それから新入生歓迎会が行われるがレッド寮の食事は滅茶苦茶質素、何せ白米に味噌汁、めざしに沢庵という粗食だ。レッドの生徒は唖然としていて全く手をつけようとしない。

「あ、美味い」

「あ、ほんと。この沢庵よく漬けられてるね」

「お、ほんとだ美味ぇ！」

「ちょ、ちょっとライ君アルフ君アニキ、まずいっすよ……まだ先生話してる途中」

「あはは、小さい事は気にしないのニャー」

しかしライとアルフ、十代はあっさり食っており、同席の翔が注意していると教師でありこの寮の寮長こと大徳寺は三人を見下ろしながら微笑みの表情でそう言う。その妙な威圧感に三人は冷や汗を流していた。

それからさっさと食事を終えたライとアルフは部屋に戻り、エルフィに連絡を取る。

［ライ、どうしたの？］

「お、凄い。テレビ電話みたいだ。あぁエルフィ……騒がしいけど歓迎会中か？」

［まあね。でもまだちゃんとした知り合いは明日香くらいしかいないし、その明日香は他の女子に囲まれてるから。私に注意を払ってる人なんていないし大丈夫、それより何？］

ＰＤＡの画面に映ったエルフィの顔を見たライは感嘆の声を上げた後、画面の方からざわざわという声が聞こえてくるのに気づいて尋ねる。それにエルフィは頷き、周りを見る。エルフィは右手にグラスにジュースを入れた状態で壁に背を預け左手でＰＤＡを持った状態、明日香は女子に囲まれてキャーキャー言われており、他の生徒も食事を取っているか話しているか。ライから連絡が来てわざとと

はいえ孤立しているエルフィに話しかけてくる相手も今のところ見受けられなかった。

「ああ、明日のデュエルだけど頼みたい事があるんだ……」

それからライはエルフィに頼みたい事を言い、それを聞いたエルフィはふうんと頷く。

［分かったわ。任せておいて］

「サンキュ、んじゃまた明日な」

［ええ。お休み］

エルフィがそれを了承するとライは返し、それにエルフィもそう挨拶すると電話を切った。

「ライ？」

「ひゃあっ！？」

すると突然声をかけられ、エルフィは驚いたように飛び上がる。いつの間にか明日香が近くに立っており、その横には茶色い髪の女子と、黒い髪の女子がいる。

「ああ、紹介するわね。枕田ジュンコに浜口ももえ」

「よろしく」

「よろしくお願いいたしますわ。ところで先ほど明日香さんがライと尋ねていましたが、彼氏さんですか？」

「えっ！？　あ、いや、その……」

明日香の紹介を受けた茶髪の女子――ジュンコは軽く挨拶し、黒髪の女子――ももえもにこりと笑って挨拶した後目を輝かせてずいっとエルフィに迫る。その言葉を聞いたエルフィは顔を赤く染めてＰＤＡを自分の後ろに隠す。

「彼氏さんなのですね！？　一体どのような殿方なのですか！？」

「え、いや、だからそのっ！」

ももえがグイグイと迫り、エルフィは慌てたように後ずさりする。それからジュンコも悪ノリし、しばらくエルフィは二人に弄り倒され明日香はその光景を見て腕組みをしながら少し呆れたように微笑んで、もうと息をついていた。

翌日、十代と万丈目は、万丈目が指定した森林の中にある広場で対峙していた。その近くには二人を除けば十代が連れてきたライ、アルフ、翔の姿しかない。

「いくぞ、遊城十代！　俺は、絶対に負けん！」

「ああ！　全てをぶつけ合おうぜ、勝ち負けはその後だ！」

二人はそう言い合うとデュエルディスクを展開する。

「「デュエル！！！」」

そして二人の声が重なり、デュエルが幕を開けた。

第二話　入学、そして顔合わせ（後書き）

《次回予告》
翔「ついに僕達もデュエルアカデミアの生徒ッス！」
ライ「ああ、五年も待ってやっと物語のスタートだな」
翔「五年？」
アルフ「こっちの話だよ、気にしないで。そして入学して早々十代君と万丈目君のデュエルだね」
翔「うん！　幕を開けたアニキと万丈目君のデュエル、でもアニキのHEROデッキに勝てる相手なんているわけないッス！……ってあれ？　ライ君もアルフ君もどこ行くの？　アニキのデュエルの決着見逃しちゃうッスよ？……次回！　「十代VS万丈目、そして空時兄弟の暗躍！」　！！」
ライ・アルフ「「デュエルスタンバイ！！！」」
翔「それシリーズが違うッス！」

――――――――――――――――――――

とりあえず、なんとなくアニメ＋漫画な雰囲気になってます。あ、でも十代に漫画版E・HEROを使わせる予定はありませんから安心してください。まあ魔法・罠に関しては分かりませんけどね。
さてと……ま、それでは。

第三話　十代ＶＳ万丈目、そして空時兄弟の暗躍

「「デュエル！！！」」

実技授業の時間、デュエルアカデミアに広がる森林の中、そこで十代と万丈目はデュエルを行う。その宣言とも言える掛け声の後万丈目が声を出した。

「俺が先攻を貰う！　ドロー！」

その言葉と共に万丈目はカードをドローし、手札を吟味するとその内の一枚を手に取る。

「俺は［仮面竜（マスクド・ドラゴン）］を守備表示で召喚！　カードを一枚セットしてターンエンドだ」

仮面竜　守備力：１１００

仮面竜（マスクド・ドラゴン）
効果モンスター
星３／炎属性／ドラゴン族
攻１４００／守１１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

万丈目の場に一体の竜が姿勢を低くした状態で現れ、その後ろに一

枚のカードが伏せられる。

「俺のターン、ドロー！……俺は［Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン］を攻撃表示で召喚し、装備魔法［スパークガン］をスパークマンに装備！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　攻撃力：１６００

十代の場に光のＨＥＲＯが現れ、その右手に銃が握られる。

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン
通常モンスター
星４／光属性／戦士族
攻１６００／守１４００
様々な武器を使いこなす、光の戦士のＥ・ＨＥＲＯ。
聖なる輝きスパークフラッシュが悪の退路を断つ。

スパークガン
装備魔法
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」にのみ装備可能。
自分のターンのメインフェイズ時に表側表示モンスター１体の表示形式を変更する事ができる。
この効果を３回使用した後、このカードを破壊する。

「スパークガンの効果発動、俺のターンのメインフェイズに表側表示モンスター一体の表示形式を変更する事が出来る！　俺は仮面竜の表示形式を変更させ、スパークマンで仮面竜を攻撃！　スパークフラッシュ！」

仮面竜　守備力：１１００→攻撃力：１４００

スパークマンが放つ聖なる輝きスパークフラッシュが仮面竜を破壊する、が万丈目は特に痛くないというような平然とした表情をしていた。

「仮面竜の効果発動！　このカードが戦闘によって破壊された時、俺のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスターを一体特殊召喚する。俺は攻撃力１３００の［洞窟に潜む竜］を守備表示で特殊召喚！」ＬＰ４０００→３８００

洞窟に潜む竜　守備力：２０００

洞窟に潜む竜
通常モンスター
星４／風属性／ドラゴン族
攻１３００／守２０００
洞窟に潜む巨大なドラゴン。
普段はおとなしいが、怒ると恐ろしい。
財宝を守っていると伝えられている。

「くっ、俺はリバースカードを一枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー……俺は洞窟に潜む竜を生贄に捧げ、［マテリアルドラゴン］を攻撃表示で召喚！」

マテリアルドラゴン　攻撃力：２４００

マテリアルドラゴン
効果モンスター
星６／光属性／ドラゴン族
攻２４００／守２０００
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、ライフポイントにダメージを与える効果は、ライフポイントを回復する効果になる。
また、「フィールド上のモンスターを破壊する効果」を持つ魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、手札を１枚墓地へ送る事でその発動を無効にし破壊する。

大人しい竜が光に包まれ、その中から金色に輝く竜が姿を現し、咆哮を上げる。

「いくぞ、マテリアルドラゴンでスパークマンを攻撃！」

「リバースカードオープン、［攻撃の無力化］！　攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

「ちぃっ！　ターンエンドだ！」

マテリアルドラゴンが放ったブレスは時空の穴に飲み込まれて消滅し、それを見た万丈目は舌打ちを叩いてターンを終了する。

攻撃の無力化

カウンター罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「俺のターン、ドロー！　よし、俺は魔法カード［融合］を発動！
手札のフェザーマンとバーストレディを融合！」

「来るッス！」

風のＨＥＲＯと炎のＨＥＲＯが混ざり合い、新たなＨＥＲＯを生み出す。

「来い、［Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン］！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻撃力：２１００

［ハアアアァァァッ！！！］

風と炎の力を持つＨＥＲＯ、フレイム・ウィングマン。彼は炎と風を纏って雄叫びを上げると十代のフィールドに降り立った。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン
通常モンスター
星３／風属性／戦士族
攻１０００／守１０００
風を操り空を舞う翼をもったＥ・ＨＥＲＯ。
天空からの一撃、フェザーブレイクで悪を裁く。

Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ
通常モンスター
星３／炎属性／戦士族
攻１２００／守　８００
炎を操るＥ・ＨＥＲＯの紅一点。
紅蓮の炎、バーストファイヤーが悪を焼き尽くす。

融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン
融合・効果モンスター
星６／風属性／戦士族
攻２１００／守１２００
「Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ」
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「スパークガンの効果発動、マテリアルドラゴンの表示形式を変更するぜ！　そしてバトルフェイズ、フレイム・ウィングマンでマテリアルドラゴンを攻撃！　フレイム・シュートォ！！」

マテリアルドラゴン　攻撃力：２４００→守備力：２０００

フレイム・ウィングマンの右手、竜の頭から炎が発射され、雷の銃により防御の構えになってしまったマテリアルドラゴンに迫る。

「リバースカードオープン［バーストブレス］！　俺の場のドラゴン一体を生贄に捧げて発動し、生贄に捧げたドラゴンの攻撃力以下の守備力を持つフィールド上のモンスターを全て破壊する！」

しかしその炎が当たる前にマテリアルドラゴンは己の生命力全てを賭けたブレスを放ち、そのブレスに十代の場のヒーローが全て焼き尽くされる。お互いの場が全滅状態だ。

「……くそっ、俺はモンスターをセットし、ターンを終了するぜ」

十代は残る一枚の手札だったモンスターカードを場に伏せるとターンを終了した。

簡易状況説明

十代：ＬＰ４０００　手札零枚

フィールド：モンスター一体裏側守備表示　伏せカードなし

万丈目：ＬＰ３８００　手札四枚

フィールド：モンスターなし　魔法、罠なし

「手加減はしないぞ……俺のターン、ドロー！」

万丈目はそうとだけ言うとカードをドローし、にやりと笑みを浮かべる。

「俺は［ランス・リンドブルム］を攻撃表示で召喚！　ランス・リンドブルムで守備モンスターを攻撃、リンドブルムは守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力をリンドブルムの攻撃力が超えていればその差の数値分のダメージを相手プレイヤーに与える！　ゆけ、ランス・リンドブルム！！」

ランス・リンドブルム　攻撃力：１８００

万丈目に場に現れたのはランスを持った竜人、そして万丈目の指示を聞くと竜人は十代の場のモンスター目掛けて突進し、十代の場のモンスターが姿を現す。

「俺の守備モンスターは［メタモルポット］！　そのリバース効果が発動し、互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たに五枚のカードをドローする！　ダメージは受けちまったけど一気に五枚ドローだぜ！」ＬＰ４０００→２８００

メタモルポット　守備力：６００

「ちっ！」

十代の場に現れた壺がお互いの手札を全て吸い込み、新たに五枚の手札を彼らに向けて吐き出す。零枚の手札が五枚になった十代はともかく万丈目は手札を捨てる羽目になったせいか表情が険しい。

ランス・リンドブルム
効果モンスター
星４／風属性／ドラゴン族

攻１８００／守１２００
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

メタモルポット
効果モンスター
星２／地属性／岩石族
攻　７００／守　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを５枚ドローする。

「くっ……俺はカードを二枚セットし、ターン終了だ」

「俺のターン、ドロー！　よし、俺は［貪欲な壺］を発動！　墓地のモンスター、スパークマン、フェザーマン、バーストレディ、メタモルポット、そしてフレイム・ウィングマンをデッキに戻してカードを二枚ドロー！」

貪欲な壺
通常魔法
自分の墓地に存在するモンスター５体を選択し、デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「俺は［Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン］を守備表示で召喚！　カードを二枚セットしてターンエンドだ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン
通常モンスター
星４／地属性／戦士族
攻　８００／守２０００
粘土でできた頑丈な体を持つＥ・ＨＥＲＯ。
体をはって、仲間のＥ・ＨＥＲＯを守り抜く。

「俺のターン、ドロー！　俺はランス・リンドブルムを生贄に捧げ、［ホワイト・ホーンズ・ドラゴン］を召喚！！　ホワイト・ホーンズ・ドラゴンの効果発動！　このカードの召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在する魔法カードを五枚まで除外し、除外した枚数×３００ポイント攻撃力を上昇させる！　俺は貴様の墓地からスパークガン、融合、貪欲な壺を除外！　三枚除外したため攻撃力は９００上昇する！」

「なにっ！？」

ホワイト・ホーンズ・ドラゴン　攻撃力：２２００→３１００

万丈目に場に現れたドラゴンに生えた一本の角、それが不思議な光を放ち始めたと思ったら十代の場の三枚の魔法カードがその角に吸収されていく。そしてドラゴンの攻撃力が増大した。

ホワイト・ホーンズ・ドラゴン
効果モンスター
星６／闇属性／ドラゴン族
攻２２００／守１４００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、相手の墓地に存在する魔法カードを５枚まで選択してゲームから除外する。
このカードの攻撃力は、この効果で除外したカードの数×３００ポイントアップする。

「ホワイト・ホーンズ・ドラゴンでクレイマンを攻撃！　ホーンバスターブレス！！」

「ぐあああぁぁぁっ！　くっ、リバースカードオープン、［ヒーロー・シグナル］！　その効果で俺はデッキから［Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン］を守備表示で特殊召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　守備力：１０００

ヒーロー・シグナル
通常罠
自分フィールド上のモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時に発動する事ができる。
自分の手札またはデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついたレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する。

「甘いわ！　リバースカードオープン［リビングデッドの呼び声］！　墓地から［ランス・リンドブルム］を攻撃表示で特殊召喚！　バトルフェイズ時の特殊召喚のため攻撃の権利がある。ランス・リンドブルムでフェザーマンを攻撃！」

ランス・リンドブルム　攻撃力：１８００

「こっちは通すか！　リバースカードオープン［ヒーローバリア］！　俺の場にＥ・ＨＥＲＯが存在する時、相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

ヒーローバリア
通常罠
自分フィールド上に「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

白い角を持つ赤き竜のブレスが地のＨＥＲＯを破壊したと思ったら仲間のＨＥＲＯを呼ぶシグナルがその場を照らし出し、風のＨＥＲＯが守りを固める。しかしその次の瞬間万丈目の場に先ほど赤き竜の生贄となった竜人が姿を現し、フェザーマンに突進する。しかしその攻撃はＨＥＲＯの防御用バリアで防がれた。

「ちっ、ターンエンドだ」

「い、一進一退ッス……」

「そうだね……」

万丈目が舌打ちをしてターンを終了し、観戦している翔が僅かに震えながら呟くとアルフもうんと頷いて返す。

「俺のターン、ドロー！」

十代は力強くカードをドローし、それを見るとよしと頷く。

「魔法カード［融合］を発動！　場のフェザーマンと手札のバーストレディを融合！　もう一度力を貸してくれ、［Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン］！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　攻撃力：２１００

「永続魔法［騎士道精神］を発動！　さらにＨＥＲＯの戦いの舞台、［摩天楼―スカイスクレイパー―］を発動するぜ！」

「これが噂に聞いた、クロノス教諭を倒したというコンボか……」

フィールドが摩天楼へと移り変わり、それを見ながら万丈目はそう呟く。

騎士道精神
永続魔法
自分のフィールド上モンスターは、攻撃力の同じモンスターとの戦闘では破壊されない。

摩天楼　―スカイスクレイパー―

フィールド魔法
「E・HERO」と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ１０００ポイントアップする。

「いくぜ、フレイム・ウィングマンでホワイト・ホーンズ・ドラゴンを攻撃！　スカイスクレイパー・シュート！！　スカイスクレイパーの効果で攻撃力が１０００ポイント上昇する！」

E・HERO　フレイム・ウィングマン　攻撃力：２１００→３１００

「ちぃっ！！、！？　何故フレイム・ウィングマンが破壊されない！？」

「騎士道精神の効果により、同じ攻撃力同士のモンスターでの戦闘の時、俺のモンスターは破壊されない！　そして、フレイム・ウィングマンの効果発動！　戦闘により破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手に与える！」

「くっ、ぐおおぉぉぉっ！！」LP３８００→１６００

万丈目の驚愕の声に十代が説明、そして続けての言葉の後フレイム・ウィングマンが発した炎が万丈目を焼き尽くす。

「……あれ？　ダメージ計算おかしくねえか？　３１００のダメージのはず……」

「フレイム・ウィングマンのバーン効果は墓地に送った時の攻撃力で参照されるんだ。だからホワイト・ホーンズ・ドラゴン本来の攻撃力、２２００のダメージになるんだよ」

「あー。なるほど」

簡易状況説明
十代：ＬＰ２８００　手札一枚
フィールド：フレイム・ウィングマン攻撃表示　摩天楼―スカイスクレイパー―、騎士道精神発動中

万丈目：ＬＰ１６００　手札三枚
フィールド：ランス・リンドブルム攻撃表示　リビングデッドの呼び声発動中、伏せカード一枚

十代の言葉にアルフが説明の声を出し、それを聞いた十代は納得したように頷く。それからライが辺りをきょろきょろと見回すと口を開いた。

「翔、悪いけどトイレに行ってくる」

「え？　あ、うん」

「あ、僕も行くよ」

「アルフ君まで？」

ライの言葉に翔が頷くとアルフもそう言い、翔は首を傾げてから頷く。そして二人はその場を離れ、翔達の姿が見えなくなるとある一つの方向に向けて迷いなく走り出した。

「はぁ、はぁ、本当にこっちでいいんだろうな！？」

「ああ、ようやく見つけたぜ……」

「レッドのクズなんかを相手するなんてあいつも酔狂だよなぁ」

「まあ、万が一のことがあったらいけねえからな。急ぐぞ」

森林のとある場所、四人のブルー男子が十代と万丈目がデュエルを行っている場所向けて一直線に走っていた。すると突然パンパンパンという銃声がその場に響く。

「なんだ！？」

それに全員が足を止める。そこにライとアルフが木の後ろからゆっくりと姿を現した。

「お前らは昨日遊城十代と一緒にいた！？」

「オイ、戦ってるレッドの奴が万丈目に負けそうだからその姿を見させないとでも言うのか？」

「別にレッドが負けるなんて当たり前だろ？　俺達のようなエリートなら当然、最底辺の野郎でもブルーならそれぐらい当たり前だか

らな」

「それよりさっきの銃声はなんだ？　デュエルじゃ勝てないからって直接的な攻撃か？」

「「……」」

ブルー男子四人の言葉にライとアルフは何も返さず、一瞬の目配せでタイミングを合わせて同時に口を開いた。

「「おい、デュエルしろよ」」

「「「「ハァ！！？？」」」」

どの問いにも答えていない、正に言葉のドッジボール。ちなみに二人はこうなる事を予想しており、それでなおこう言った理由、それは……ただ単に一度やってみたかった。それだけである。

「冗談はさておき、まあ半分は冗談じゃないんだけど……主にデュエル挑む辺り」

「お、おまっ、レッドがブルー相手にデュエルを挑むだと！？　しかも四対二で！？」

「ああ。ハンディには充分だろ？」

アルフのコホンと咳をした後の言葉にブルー生徒Ａが叫び声を上げるとライがさらっと続ける。それが逆鱗に触れたのかブルー生徒達から妙な怒気が発され始めた。

「あなた達が行おうとしている事は予想がついてます。どうせブルーの人間、万丈目君がレッドの人間、十代君に負けるなんてブルーのプライドが許さない、だから邪魔をしに行く。とでもいうところでしょ？」

「はは、ただの推論で酷い言い方だな。まあ半分くらいは当たってるけど」

「確かにブルーの人間がレッドのクズに負けるなんてブルーの面汚しだけどな、万一レッドが万丈目に勝った後、そいつを倒せば俺達は万丈目よりも強いということになる。あいつをブルーの恥にしてやろうとな」

アルフの言葉に二人のブルー生徒が返し、それを聞くとライがにやりと笑ってデュエルディスクを構える。

「ま、ボスを倒す前には門番を倒すが道理。俺達に負けたらこの場を退いてもらおうか、ルールは、四対二じゃ色々めんどくさそうだし俺とアルフがそれぞれ二人ずつ相手する変則タッグデュエルでどう？　ルールはタッグフォースルールでライフは共有４０００」

「はっ、実質二対一かよ！？」

「無謀も間抜けもここまで来れば立派なもんだ、一瞬で片付けてやるよ！」

ライの提案に残ったブルー生徒二人が言い、六人がデュエルディスクを展開する。便宜上ライと戦う方をブルーＡ、ブルーＢ。アルフと戦う方をブルーＣ、ブルーＤと呼ぶ事にしよう。

「「「「デュエル！！！！」」」」
「「「「デュエル！！！！」」」」

そして六人の声が重なり合った。

第三話　十代ＶＳ万丈目、そして空時兄弟の暗躍（後書き）

《次回予告》

翔「アニキと万丈目君のデュエルは一進一退……だっていうのにライ君とアルフ君はトイレに行くなんて、全く暢気だなぁ……って思ってたら森の中からデュエルの声が聞こえてきたし一体どうなっちゃうんだろ？……次回、［決着、十代ＶＳ万丈目、空時兄弟ＶＳブルーカルテット］！　デュエルスタンバイッス！」

いきなり二話も投稿しちゃって申し訳ありません……いや、ちゃんと十代ＶＳ万丈目、空時兄弟ＶＳブルーカルテット全部終わらせてから投稿する予定だったんですが……いやーまあ長いこと長いこと。こりゃどっかで切った方がいいと判断して前編後編に分ける事にしたんです。読者がそこまでいる小説か分かりませんけど、後編はうまく行きゃ今日中に投稿できますので。それではー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4694z/

遊戯王ＧＸ～パラレル・トラベラー～

2011年12月18日11時55分発行